

天童寺に於て

余語 翠巖

昨今、中国の方針変更によって日本の人が、いろいろのめあてを以て中国へ旅することができ、私共曹洞宗の流の中にある者も、好縁にさそわれて多くの人が道元禪師ゆかりの天童寺参拝に出かけるようになり、そのよき縁に深い感激を覚えることである。私も昭和五十五年麦秋の頃、その縁を頂くことができて天童寺を拝することを得たことである。その所感を求められたことであるが、実況については、たくさんのお方が述べ尽しておられる故に、それを省くとして、道元禪師が天童山——この呼び名の方が私共には親しくひびく——に足を運ばれる頃の御心地を大胆に想像したことである。現在立ち並ぶ建物はおそらく当時のものではないのであろうが周囲の山水はそのかたちを留めているのであろう。緑はゆる山容を眺めながら感懐一しおである。

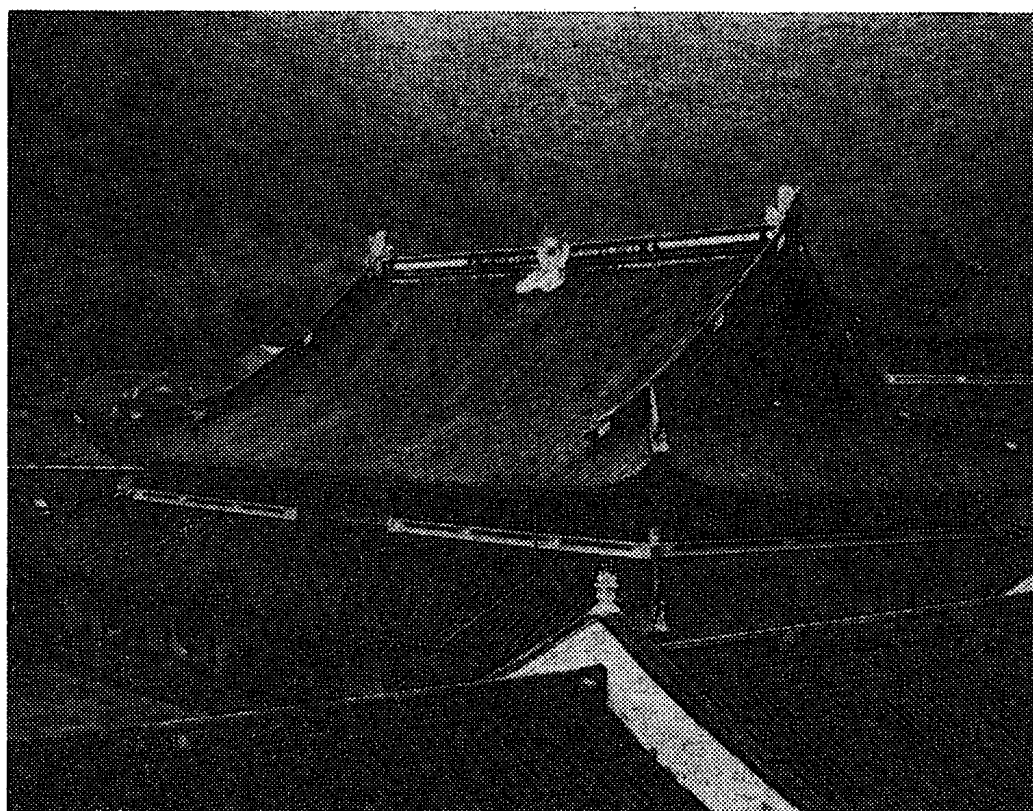
道元禪師が建仁寺に栄西禪師を尋ねて、「三世諸仏不知有、狸奴白拈却知有」の答処を得られたと伝う。栄西禪師との相見の歴史的事実を問うのではない。誰かにこの答を得られたのであら

天童寺に於て（余語）

う。この語は南泉和尚の語として語りつがれたと云う。この則について大凡の解釈は、三世諸仏は珍重すべき那一物の存在すら忘れ去って自由無礙であるが、狸奴白拈とも云うべき未達の者は、その那一物にしばられて振りまわされている所謂金鎖の徒であると云うのである。それを不是と云うのではないが、今少し考をふかめて見ると、一心戒文の不謗三宝戒の積を見ると、於一如法界不生不生見一名不謗三宝とあるのと規を一にするように思われる。歴史的史料的研究にどう云う位置をしめるかわからないものがたくさんあるが、それがすぐれたものと仰ぐことができれば、それで事足りるように思われる。一心戒文のこの文はまことにすぐれたものと思われる。是非善悪の彼方に立つことである。信心銘で云う揀択なき世界である。三世諸仏と狸奴白拈と云う対立のない世界である。それはそれと云う世界である。赤の方がよくて紫の方がよくないなど、云わない処である。百草頭上に無辺の春が現じている世界である。

天童寺に於て（余語）

こんなこと思つて天童山に立つて変らぬ山水を眺めたことであるが、せまい宗団の中にあつて、護法とか如法とか云われることがどうでもよいようなことがあるのではないかと云うような不逞な思ふが去来する。もつと広く大きな視野に立つて見なくてはならぬように思われる。然し、一つの宗団を形造つて見ると、凡ては一にせねばならぬと云うことも一面の道理でもあらう、一つのグループには夫々のきまりのあることであるから。されど又そのグループのきまりが広い世界にもつていゝ意味をよく考えねばならぬことである。宗団の宿業というのでもあらうか、されど外から宗団を見る足場をもつことも必要である。人は遠くに旅して自分をふり返るようである。



鐘楼より仏殿を望む（天童寺）